



廊下歩行に力を入れていきます

2学期末に、子どもたちの生活の様子を職員で振り返りました。そこで出された意見の中に、学習や諸行事への取組はとても一生懸命にできていたが、身の回りの整理整頓や廊下歩行などに課題があるというものがありました。確かに、教室移動や昼休みに遊びに行くときなど、声の大きさや足音が気になることがあります。中には、急ぐあまり、つい走ってしまう子もいます。

そこで、3学期は、まず、廊下歩行を徹底することにしました。廊下で走る子は道路でも走ります。校外での事故を防ぐためにも、きちんと指導していきたいと思います。

校長室の窓から

～ 教え子からの連絡 ～

「先生、年末にみんなが集まるので会えませんか？」

12月に入ってから、10年以上前の教え子から連絡がありました。私が校長として初めて赴任した平戸市の中学校の教え子たちからです。

平戸市の最南端にあるその学校は、保護者のほとんどが漁師さんという漁師町にある小中併設校で、児童・生徒合わせて50人足らずの小規模の学校でした（現在は中学校が廃校となり、小学校だけになっています）。その子たちとは、その学校を離れてからも部活の試合や中総体の応援に行くなど、ずっと交流が続いており、今回が6年ぶりの再会でした。それぞれ就職先が決まり、学生生活最後の冬休みを親元で過ごすために帰省していました。

ところで、保護者の皆さんは「15の春」という言葉を聞いたことはありますか？ 15歳の春とは、中学校を卒業する時の春という意味です。15歳の春は、子どもたちにとって特別なものです。小学校から共に学んできた友達との別れが待っています。ただ、平戸市のその学校の子どもたちにとっては、友達との別ればかりでなく、家族との別れの春でもありました。というのも、その学校は、平戸の市街地から40km近く離れており、一番近くの高校でもバスで1時間、市街地にある進学校となるとバスで2時間以上かかります。始発のバスに乗ったとしても始業に間に合いません。そのうえ、高校では早朝から補習を行っていたので、とうてい自宅から通うことはできないのです。その子たちは、卒業した6名全員が、高校進学と共に家族の元を離れました。中学校を卒業して親元を離れた子どもたちは、大学に進学し、この春、全員が県外の企業に就職します。夢を追いかけて高校に進学することは、15歳で親と離れて暮らすことを意味していたのです。

子どもはいずれ親元を離れていきます。離島やへき地を多く抱える長崎県では、15歳で、その時を迎える子が多いという現実があります。親の立場で考えた時、中学生までしか我が子と一緒に暮らせないというのは、とてもやるせない気持ちになります。

西坂小の子どもたちも、やがて「15の春」を迎えます。迎え方は人それぞれですが、すべての子どもたちの夢が叶うことを願っています。